

ばく りゅう  
麥粒

2021. Winter

麦粒 / NO. 136

発行・キリスト教センター

目 次

偽預言者を警戒しなさい ..... 高木 総平 (3)  
外に目を向けよう ..... 吉松 純 (7)  
今は和解の時 ..... 大藪 博康 (11)





# 偽預言者を警戒しなさい

高木 総平

偽預言者に注意しなさい。彼らは羊の衣を着てあなたがたのところに  
来るが、その内側は強欲な狼である。

(新約聖書 マタイによる福音書 7章15節)

中部学院大学宗教主事の高木と申します。今日は本学のチャペル、グレースホールで録画をしています。

今のコロナの件で世界もこの社会も不安に覆われ、私たち一人一人も感染を恐れています。普段私たちは時に不安に襲われたりします。こんな時、「私たちの教祖や、組織が、その問題を解決しますよ」と、近づいてくる人がいたら、その話を聞いてみようと思う人がいても、当然かもしれません。また、取り立てて不安を持っていなくても、やはりそのような組織の人から、不安になるようなことをいっぱい聞かされると、不安や恐れのお気持ちが起こってきます。普段考えていなくても、温暖化や環境の問題、戦争や犯罪のことを考えると、この世界は不安材料でいっぱいです。ここでも、ささやくのです。「このような問題を私たちの教祖や組織だけが解決できますよ」と。

そのような組織がたくさんうごめいていて、それらが大学生の皆さんをターゲットにしているということを強く訴えるために、キリスト教の大学をはじめ、多くの大学でこれまで話をしてきました。

今年はこの名古屋学院大学で3校目です。高校も1校ありました。それらは、世界を支配する目的というそのことのために、強大な組織をつくることを目指したり、反対に小さな閉鎖的なものもあり、いろいろですが、多くの問題、特に深刻な問題を引き起こし、時には犯罪や違法行為すらも正当化するような団体のことなのです。多くの大学で勧めている国際交流やボランティアがあり、関心を持っている皆さんがいると思います。また、世界や社会の問題、あるいは生きていく上で悩んだり苦しんでいる人、孤独で寂しいと感じている人もいるかもしれません。そのような時、真面目そうな人がやっ

てきて、「私たちの団体や教会で世界中の人を救い、その結果素晴らしい世界が出来ますよ、そのためには国際交流やボランティア、そういうことも一所懸命やっていますし、あなたが必要だったら就職相談にも乗りますよ」と熱心に声をかけてきます。行ってみると若い人たちがとても楽しそうにしています。取り囲んで褒めてくれますので、とっても嬉しくなってきます。でもそれは一面で、そのような団体の中には多くの問題、時には悲惨なことを生じさせているものがいくつかあり、皆さんを狙っている…、その話を今日はしているわけでございます。

それはカルトと呼ばれる団体で、名古屋でも10以上の団体が動いています。全国の多くの大学が、このような団体から学生さんを守るために情報交換のネットワークをつくってきました。破壊的カルトと呼ばれたりもします。家族関係や心の健康、団体によっては財産、時には命を破壊するからそう呼ばれます。そんなに怖いのが本当にいるのか、あるのかと思われるのですが、そうなのです。特に正体を隠したり、ウソのサークルで勧誘したり、不安や恐怖を煽り、日本や世界が滅びるなどと脅かし、またお金をたくさん取る団体もあり、共通なのは教

祖やリーダー、その人たちに絶対服従、辞めることは困難です。ですから違う宗教だから問題にしているのではありません。勧誘方法や活動が違法だったり、問題を生じさせているからなのです。

私は35年くらい前からこの問題の相談に乗ってきました。多くの気の毒な悲惨な例を目の当たりにしてきました。今日の聖書の言葉、「羊の皮をまとった狼」という言葉がぴったりです。大学生の皆さん2万人以上に話をしてきました。犯罪者と違うのは、超能力を持った教祖、彼らの言う神、救い主の命令でやっていることなので、正しいことだと信じ込まされています。ここでまず知っていただきたいのは、皆さんのところへやってくる場合、「真面目ないい人、親切そうな人」に見える場合が多いということです。怖い、悪いということはまったく感じさせません。またとても熱心だったり強引な場合もあります。勧誘をしてくる普通のメンバーはとても「真面目」です。いろいろな団体があります。丁寧に観ていかなければなりません。では何が問題かと言うことです。多くの場合、「この世界は全て悪く、間違っている。この世界、あるいは日本も間もなく滅びる。大学も間違っている。正しいのは自分だけだ」

ということで不安を煽り、世界を救うのだという考えです。確かに世界には多くの深刻な問題があります。温暖化や人口の問題、環境の問題、不安になることがたくさんあります。今はコロナです。生きていく上でも様々な不安があります。それらを一気に解決できるのが自分たちだけだということです。ですから何か悩んでいる時、親切そうな人がやってきて、「うちに来れば真理が見つかりますよ。あなたを救うことができますよ。世界を救うことができますよ」と言うと、入っていく人たちも出てくるわけです。その結果、言いましたような多くの事件や問題を起こすのです。中にはまるで普通の教会としか思えないような施設を持っているところもあります。人間はある環境、心の状態になりますと、とんでもないものでも信じてしまうのです。

例えばオウム真理教。25年前に大事件を起こしました。その結果、かつて有能だと思われていた若い人たち12人が死刑になりました。教祖も死刑になっています。30人もの人を殺し、もっと多い可能性もあると思われていますが、6000人以上の人たちを傷つけたからです。でも彼らには正しいことでした。そのオウム真理教も教祖の超能力を宣伝してメンバー

たちは信じました。靈感商法という悪徳商法をやり続けている団体もあります。この団体は家庭を大切にすると言いながら、深刻な問題を引き起こす合同結婚でも有名です。今は結婚の斡旋もしていません。外から見て無茶苦茶でも、信じ込まされています。そのやり方をマインドコントロール、そう呼ぶ人もいます。人間はタイミングによっては引っ掛かり、極端な情報のみを信じる場合があるのです。その学生組織もあります。また他には、教祖が酷いセクハラ事件を起こして、韓国の刑務所に入っていて、少し前に刑期が終わって、刑務所を出た団体も日本で活動しています。オウム真理教は名前が変わって東京中心ですが、まったく反省はしていません。ゴスペルなどのグループを通して問題ある勧誘をする団体、親鸞や日蓮を持ち出す仏教系の問題ある団体もあります。これらの団体の手口を知って、気をつけてください。特に正体を隠した場合には、国際交流、ボランティア、中にはスポーツ系もあります。はっきりわからなければ、しつこく訊いてください。また言う事が変わったら断ってください。スポーツ団体なのに宗教の話が出てくる、そのような場合です。また場所は大学のキャンパスや街頭、本屋さん、

バイト先、家にもやってきます。また就職相談をやっているところがあると言いました。将来は職場、あるいは友人から、家族から、ホームページや本でもSNSも、つまりいたるところに彼らの勧誘が待ち構えているということです。強引なところはきっぱり断ってください。何か疑えという話ですけど、自分や家族を守るためには必要な知恵です。悪徳商法にも有効です。困ったり、何かわからない事があったり、情報があれば大学の先生たちに伝えてください。相談してくださ

い。皆さんだけでは手に負えないこともたくさんあります。また考えてください。カルトに入った人たちは、(教祖やリーダー、組織が悪いのですが)世界や社会、人生の問題の解決を求めたからその気持ちを利用されたのです。皆さんも、そのようなことをどう考えて求めていくのか、そしてなぜカルトが問題になり、そこに行く人たちがたくさんいるのか、皆さんなりに考えていただきたいと思います。話は以上にいたします。

(たかき そうへい 岐阜済美学院 宗教総主事、中部学院大学 宗教主事 2020.11.24)

# 外に目を向けよう

吉松 純

さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行き、イエスの指示された山に登った。そして、イエスに会い、ひれ伏した。しかし、疑う者もいた。

イエスは、近寄って来て言われた。「私は天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民を弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼(バプテスマ)を受け、あなたがたに命じたことをすべて守るように教えなさい。私は世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」

(新約聖書 マタイによる福音書 28章16～20節)

改めてご挨拶申し上げます。金城学院大学宗教主事の吉松純です。今日は名古屋学院大学のチャペルアワーにお招きいただき心より感謝いたします。私が奉職している金城学院大学は長老派系のキリスト教主義学校ですが、実は私自身は皆さんと同じメソジストです。1979年に渡米し、大学、神学校、そして大学院を卒業し、1995年に合同メソジスト教会で按手礼を受け牧師になりました。それ以来ずっとニュージャージーで教会にお仕えてまいりました。今もニュージャージー州を統括するグレーター・ニュージャージー教区の会員です。ですから名古屋学院大学は非常に私にとってはメソジスト

ということで親しみを覚える学校であります。ということで、今日はメソジスト繋がりのジョン・ウェスレーの話をしたと思うのですが、名古屋学院大学の皆さんにジョン・ウェスレーの話をするというのは「釈迦に説法」というか、「主イエスに説教」という気もしないではないのですが、どうぞしばしお聴きください。

メソジストの創始者ジョン・ウェスレーが生まれたのは1703年、お父さんのサミュエルはイギリス国教会の聖職者、神父です。それからお母さんのスザンナは敬虔深いキリスト者でした。サミュエルとスザンナの間には19人の子どもが生ま

れます。しかしながら大人まで成長したのはそのうちの10人、ジョンとそれから弟のチャールズもその10人の中にいました。後にウェスレー兄弟として有名になるジョンとチャールズはイギリスの名門大学、オックスフォード大学の神学部に入学します。そしてイギリス国教会の聖職者の道を歩みます。オックスフォードといえば皆さんはおそらく世界でもトップを争う名門の大学としてご存知なのではないかと思います。王侯貴族の子ども達がそこに学ぶ。しかしながらキリスト教に学ぶ、信仰という意味では非常にぬるい生活をしている者が多かったようです。そこでジョンとチャールズは規則正しい規律に満ちた信仰生活を提唱し、ホーリークラブというものを立ち上げます。どういったことをしたかということ、朝起きてすぐ祈祷会をする。そして朝食後大学の講義に出かけます。講義から帰ってくると皆で礼拝をもち、そして交わりをし、そして就寝前は一人一人が一日を振り返って祈る、というようなですね、非常に信仰に満ち溢れた敬虔深い生活をしておりました。王侯貴族の学生たちにとって、その規則正しい生活は非常に新鮮なものに映りました。ですから多くの者がそのホーリークラブに加わりました。し

かしながら一方ではあまりにも規律を守るその生活スタイルがメソッドmethod規律、規則、手順といったものを意味する言葉になぞらえて、彼らはそういったものを守る人、メソジストmethodistだというふうにあだ名がつきます。しかしながらこのあだ名が後々メソジストという教会に発展するわけですが、ジョンとチャールズはそのリーダーとして非常にオックスフォードで活躍しました。そして1726年、ジョンはイギリス国教会で按手礼を受けて国教会の聖職者になります。オックスフォードでの成功を携えて、彼の聖職者としての生活は順風満帆でした。10年イギリス国内でお仕えした後、1736年彼は一大決心してアメリカ、まだ当時はアメリカではなく植民地だったんですけれども、新大陸に伝道することにしました。新大陸の先住民族を皆キリスト教徒に回心させる、そのような大志を抱いてジョンは出発します。そして今日のアメリカ、ジョージア州サバンナ、その頃はコロニー、まあ植民地ですけれども、サバンナに着きました。そして彼はサバンナで宣教活動、教会の礼拝の司式などを始めるのですが、ここで彼は大きな挫折を経験します。サバンナの住民といえばヨーロッパからの移民、そして



先住民族がほとんどでした。中には文盲で全く聖書すら読めない人たちもいました。その人たちの生活はというと、朝は明るくなると起床して、日がな一日開墾作業に従事し、そして帰ってきたら時にそのまま泥だらけのまま、暗くなったら就寝するというような生活でした。また植民地ですから、イギリスのような文化的な行事や催しも何もない。また教会の人はというと、オックスフォード時代とは比べ物にならない、またイギリスの教会とは比べ物にならない、王侯貴族と比べてはならないんですけども、全く違う雰囲気ウェスレーはかなり落胆しました。それだけでなく、彼はアメリカに居た時代にですね、婚約者との破局を迎えてしまいます。そして2年も経たない内にウェスレーは逃げ帰るようにしてイギリスに帰ってしまいます。彼はまさに人生のどん底の中にいました。一時は牧師、国教会では神父ですね、神父を辞めようと思うぐらい、思い悩み、悶々とした日々を過ごしました。そのような状態が半年以上続いたある日、1738年5月24日のことです。後にオルダズゲイト（アルダスゲイト）の回心と呼ばれる、生まれ変わりを経験します。ここからジョン・ウェスレーの真の伝道者としての生

活が始まります。彼は友人のジョージ・ホウィットフィールド神父と一緒に、教会の中から外に出て行きます。そして路傍伝道を始めました。これまでイギリス国教会の神父たちは王侯貴族が集まる、もう非常に楽な、安全な教会の中に居て、伝道ということに関しては一切してきませんでした。しかしウェスレーとホウィットフィールドは街に出て、野外で説教を始めます。そしてそれまで国教会が手を差し伸べなかった町工場の人たち、農民、そして時には監獄にいる罪人たち、囚人たちにも説教をしてまわりました。これまで神様のみ言葉を聴いたことのなかった多くの人たちが、ジョン・ウェスレーとホウィットフィールドによって回心に導かれました。こうしてメソジスト教会が誕生しました。

さて、今日、私たち大学も教会も“コロナ”下であってやや内向きになっているような気がいたします。外に出て行かずうちに中に籠っている。感染予防という意味では仕方ないのですが、やはり常に前向きに外に出ていく、ということが必要なような気がいたします。そのような気概が私たちには必要なのではないでしょうか。冒頭で読みましたマタイによる福音書28章16～20節、これはグレー

トコミッションと英語では言われていまして、日本語では大宣教令とか大宣教命令という風に訳されていますが、主イエスが御国に帰る前に弟子たちに出したミッションです。それは一つ目、世界に出ていくこと。二つ目、福音を宣べ伝える。三つ目、全ての民を弟子にして洗礼を授ける。そして四つ目、教えを守る、というものです。主イエスは皆が牧師になればとは言っていません。教員であっても職員であっても、あるいはどのような職種にあっても、私たちは外に出ていく、そして教える、また福音を宣べ伝える、そのように主イエスは言われています。私たちはともすると安全な場所に居たいという誘惑に駆られます。しかし、外に出て行って、伝道しない限り何も変わり

ません。このコロナ禍の中で伝道し、また学生に手を差し伸べる、そして学生を教え育てていく、そのためには何をすべきでしょうか。名古屋学院大学と金城学院、そして多くのキリスト教の学校が学び舎として競い合い、そして一方では手を携えて共に宣教をする。そのようなことができれば本当にもっともっとこの世界は良くなるのではないのでしょうか。かくいう私も今回名古屋学院大学のお招きに預かり、一步外に踏み出しました。皆さんはいかがでしょう。今日、この日、この時、外に出て、宣教をする、福音を宣べ伝える、そして学生たちを教え、育てる。これが私たちに課せられたミッションではないでしょうか。

(よしまつ じゅん 金城学院大学 宗教主事 2020.10.20)

# 今は和解の時

大 藪 博 康

『何事も利己心や虚栄心からするのではなく、へりくだって、互いに相手を自分よりも優れた者と考えなさい。めいめい、自分のことだけではなく、他人のことにも注意を払いなさい。互いにこのことを心がけなさい。それはキリスト・イエスにも見られるものです。』

キリストは神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になりました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。こうして、天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずき、すべての舌が「イエス・キリストは主である」と公に宣べて、父である神をたたえるのです。』

(新約聖書 フィリピの信徒への手紙 2章3～11節)

こんにちは。名古屋学院、名古屋中学校・高等学校で聖書の授業を担当している大藪博康と申します。私はこの学校で約20年、聖書の授業を行ってきました。

20年前、聖書の授業をしていても、生徒たちが騒いで聞いてくれませんでした。やんちゃな生徒もたくさんいました。20年たってだいぶ生徒の様子も変わってきました。今はちゃんと話を聞いてくれます。また宗教に対して、キリスト教に対

して関心を持って聞いてくれる生徒も増えてきたように思います。生徒とやり取りをしながら、私自身キリスト教のメッセージや聖書の言葉から学ぶ日々であります。

本校のチャペルは約60年前に建てられました。ここが名古屋学院大学の発祥の地であります。ここから大学は瀬戸のキャンパスに移り、そして現在は白鳥、日比野にもキャンパスが展開して、日々皆さ

んが活動されています。

このチャペルで、本校は週に一度、各学年で集まってチャペル礼拝を行ってきました。週に一度、朝、この場所で生徒たちは大きな声で讃美歌を歌い、聖書を読み、そして先生から話を聴きます。大学と違って全員参加ですので、生徒の中には朝から面倒くさいなあと思う生徒もいることと思います。しかし週に一度の礼拝の時間はとても大切であると、私は日々思っております。今はこのコロナ禍なので、全員が集まって礼拝ができませんが、学年半分の生徒はチャペルを使って礼拝し、半分は教室でZoomを使って礼拝しています。

このチャペル礼拝で聞いた話をいつまでも心に覚えているという卒業生の言葉を聞くことが多々あります。時々、70代、80代の同窓生の方がふらっと訪ねてこられて、「このチャペル懐かしいなあ。」「ちょうど自分が在学中にこのチャペルが建ちました」とか、そういう話を聞かせてくださることがあります。このチャペルに入って感慨深い想いを抱き、目からスーッと涙が流れる、そのような人もいます。このチャペルという場所は、在学中はあまり意味を感じない場所かもしれませんが、卒業後何年かしてから思い

出としてよみがえってくる、そのような場所ではないかと思っています。

本校は今年で133年の歴史を重ねます。その歴史の中で、ずっとこのチャペル礼拝というものをまもってきました。この学校は開学当初から「敬神愛人」という言葉を語ってきました。神様を敬い、隣人を愛す。この言葉をこのチャペルの礼拝でいつも生徒たちに伝えているつもりです。その言葉をいかに具現化するか、実際に自分の生活の中に活かしていくか、そういうことが現在の名古屋学院に連なる一人一人に問われているんだと思っています。

さて、キリスト教というものは、罪という問題を見つめて生きることを、ずっと伝えてきました。罪とは自分を中心として生きること。自己中心的に生きることです。自分さえ良ければいいと考えて行動することです。聖書はその最初の物語で、人は誰でも罪を持っているということを語っています。それはアダムとエバの物語です。二人はエデンの園で喜びに満ちた生活をしていました。そこは何一つ不自由のない素晴らしい環境です。一つだけ神様から禁止されていたことがありました。善悪の知識の木の実を食べてはいけないということでありました。二人の

ところに蛇が現れ、そそのかします。「その実は美味しいよ」と。二人は誘惑に負け、善悪の知識の木の実を食べてしまいます。その後二人は神様から身を隠そうとしますが、見つかってしまいます。神様がなぜ食べたのかと問うと、アダムはエバのせいにして、エバは蛇のせいにして、責任転嫁をして言い訳をしました。そんな二人を神様はエデンの園から追放しました。その後二人は厳しい環境の中、生きていかなければならなくなった、そのような物語です。善悪の知識の木の実を食べるということは、神のようになりたいという人間の思いです。神様ではなく自分を中心にして生きたい。神様の場所に自分が行って、自分の思い通りに生きていきたい。そのように思うのが人間です。そのような思いが神様との分断を生み出し、人間は神様から離れていってしまうのです。人間が神様のようになって、自分を中心に生きようとした時に、そこには神様との分断が生まれ、人間同士も分断が始まります。そして分断は争いを生み、争いは滅びへ向かっていきます。自分のエゴ、利己的な考えで、全て事を進めようとした、どこかの国の元大統領の姿を思い浮かべてください。エゴは分断を生み、分断は争いを、争いは滅

びへと向かいます。これが現実問題として起こっているのです。この罪の問題を解決するために、神様は主イエスをこの世に送られました。主イエスは分断ではなく和解を呼びかけられました。和解して、赦しあって生きることが救いの道であるということを示されました。そして究極的に十字架の死によって自分の身をささげられました。十字架の死によって主イエスは神様と人間との和解と、人間同士の和解も成し遂げてくださったのであります。主イエスの十字架の死は、この世に和解をもたらすためでした。そして主イエスによって和解が完成したのであります。そのことを信じるのがキリスト教徒であります。罪という自己中心的な生き方ではなく、主イエスによってもたらされた和解の出来事を信じて、神様にゆだね、人と和解して生きていくのがキリスト教徒の生き方であります。自分中心に生きているどこかの国の元大統領は自らをクリスチャンだと言ってはばかりありません。しかしそれは大きな間違いだと思っています。クリスチャンは自己中心、エゴの罪から解放された者なのです。自己中心的に生きるクリスチャンなどは本来存在しないはずです。

もうすぐクリスマスです。クリスマス

は主イエス・キリストの誕生を祝う時  
あります。世界に和解をもたらしてくだ  
さった主イエスを心の内に迎え入れ、分  
断ではなく和解のために働く生き方を進

めていきましょう。コロナ禍の苦しい時  
ではありますが、皆さんの健康と幸福を  
祈っています。

(おおやぶ ひろやす 名古屋中学校・高等学校 宗教部長 2020.12.8)



## チャペル・ブックレット

宗教部では今までの「宗教講演会」等のお話をブックレットにまとめています。ご希望の方は、キリスト教センターへお問い合わせください。大学ホームページからもPDFファイルでご覧いただけます。

- No.1. 「経済の論理と人間の論理」(塩沢 美代子)
- No.2. 「心を問い続けて」(谷 昌恒)
- No.3. 「国際化時代におけるキリスト教の使命」(徐 洗善)
- No.4. 「激動化する現代史と神のみことば」(池 明観)
- No.5. 「生きることの感動」(金 纓)
- No.6. 「生きるよろこび」(村田 佳寿子)
- No.7. 「心を支えているもの」(山本 将信)
- No.8. 「主の愛この眼にありて」(武岡 洋治)
- No.9. 「日本におけるキリスト教主義大学の使命」(池 明観)
- No.10. 「いのちを支えるホスピスケア」(柏木 哲夫)
- No.11. 「天と地のひびき」(小塩 節)
- No.12. 「絵本のちから」(松居 直)
- No.13. 「ハイジ、クララは歩かなくてはいけないの？  
—こどもの物語と聖書に見られる<しょうがい者>差別—  
(荒井 英子)
- No.14. 「お父さん、僕はなに人？ —間 (はざま) から読む聖書—  
(金 永秀)
- No.15. 「人権・生命の尊厳 —野宿生活者の現場から—」(松本 普)
- No.16. 「地球に、そして日本に生まれて今ここにいる」(太田 信吉)
- No.17. 「メイク・ア・ウィッシュ ～夢の応援団」(原 順子)
- No.18. 「人間関係を生きる知恵」(島 しづ子)
- No.19. 「命のことば」(水谷 誠)
- No.20. 「宗教が戦争の原因？ —神教がアブナイ？」(桃井 和馬)
- No.21. 「福田敬太郎——神に向き合った生涯」(小野 静雄)
- No.22. 「F.C.クラインと「敬神愛人」」(黒柳 志仁)
- No.23. 「祈りつつ学び、感謝しつつ働く  
—内村鑑三、名古屋英和学校赴任のころ—」(葛井 義憲)
- No.24. 「NHK連続テレビ小説『エール』とキリスト教  
キリスト教主義大学が大切にしたいこと—『敬神愛人』」(西原 廉太)